

『全少』を日本一研究する指導者による提案

ZENSHOに 挑戦しよう!



第97回

養正館館長 渡辺貴斗

ウチの子、もしかして発達障害?(その13) もっと遊びたい!(応用行動分析④)

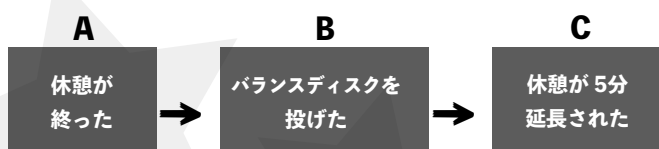
子どもが問題行動をとるには原因や理由があり、以下の4つに大別されます。前回に引き続き、道場での実例を挙げて考えていきましょう。今回は3の「要求」の対処法を考えていきます。

1. 注目されたい
「もっと僕を見て」、「かまってほしい」
2. 感覚刺激
「楽しい」、「気持ちがいい」、「落ち着く」
3. 要求
「～したい」、「～が欲しい」
4. 回避・逃避
「～されたくない」、「～したくない」

★もっと遊びたい!

休憩時間が終わって、「ハイ、休憩終わり!集合!」と言うと、無視して遊び続ける子がいます。注意すると癩癩かんしやくを起こし、遊んでいたバランスディスクを床に投げつけたりします。その子はもっと遊びたかったのです。そこで指導者は、「仕方ないなあ。じゃあ、あと5分延長します」と妥協案を出します。すると、その子は毎回休憩が終わるたびに泣き叫んで、1人だけ自分勝手な行動をとるようになります。周りの子も、「あの子ばかり、ズルい」と言って、一緒に遊びだします。

これを以下のようにABC分析で整理してみます。休憩を延長したことで、「癩癩を起こすと休憩時間が延びる」、ということを手で学んでしまったようです。



★問題が起こったらどうする?

問題行動が起きてしまったあとの対処、つまりCについて考えます。まだ遊びたいと大声で泣き叫んでいる子に対しては、相手にせず、無視して稽古を始めて構いません。大声で泣いても無駄なのだということをわからせなくてははいけません。望ましくない行動をとったときに、その子にかかりっきりになり稽古が止まってしまうと、その子も周りの子たちも、駄々をこねると稽古が止まり、先生がかまってくると学んでしまいます。決して、子供たちの交渉に乗ってはいけません。

しかしながら、その前に、Aの段階で対処しておくことが本当は大前提です。本人自身の問題であると考えのではなく、環境を変えることで問題行動が減らせないだろうか?と考えます。問題行動が起こる前、つまりAの状況を改善できないか考えてみましょう。

★チームリーダーシップとは?

例えば、休憩に入る前に子供たちと一緒に、“時計の針が3のところに来たら自分たちで帯ごとに並んで集合する”、などとルールを決めておきます。その時間自体も、子供たちに決めさせます。集合できない子がいたら、子供たち同士で声を掛け合うように、一人一人がリーダーとして機能するように話をしておきます。“誰か一人が主役になるのではなく、各自が様々な場面で入れ替わり主役になる”、これをチームリーダーシップと言います(久居高校が体育祭で実践)。

上級生のクラスでしたら、子供たち同士で声を掛け合い、集合するまで指導者は一切関わらないよう

にします。休憩時間を過ぎても指導者はジッと我慢です。元気な子は前に出てまとめ役を、前に出るのは恥ずかしいけれど気が回る子は小さい子を並べたりサポート役をやります。声を掛けることも難しい子は、自分だけでも時計を見て並びます。その姿が、結局はみんなに時間が来たことを気づかせていることとなりますので、立派なリーダーシップです。一人ひとりが、状況に合わせてリーダーになり、チームのために自分のできることをやります。

これらは、三重県の吉田真典先生が実際に取り組んでおられるチームリーダーシップで、実際に稽古を見学させていただきましたが、そのあとの稽古メニューも子どもたちだけで進めていきました。パラドックスのようですが、「指導とは、いかに指導しないか。どれだけ口出しせず我慢できるか、です」とおっしゃっていた吉田先生の言葉が印象的でした。私は「教育とは自立を促すこと」だと思っておりますので、これが本当の教育だと目から鱗でした。

年齢に合わせてヒントを与えるのもOKです。幼少の子には、1分前になったらこっそりと、「そろそろ休憩終わるね」などと個人的に声をかけます。時間通りに全員集合できたら、当然のことだと思うので、しっかり子供たちの行動を褒めます。バランスディスクを投げて怒った子は、突然休憩が終わったことが受け入れられなかったからで、1分前などに予告しておけば素直にルールに従えます。

★消去バーストにひるむな

幼少の子がおもちゃを買ってほしいとデパートで駄々をこねたとします。いくら泣いても騒いでも一切取り合わず、おもちゃを買ってあげなければ、泣

いても無駄なのだ学びます。しかしながら、はじめのうちは、こちらが要求を聞き入れないと、子供はもっと大暴れすることでしょう。このように一時的に問題行動がさらに悪化してしまうことを「消去バースト」といいます。子供はおもちゃを床に叩きつけ、命がけで自分の主張を通すべく、心が折れるような行動をとります。しかしながら心を鬼にして一切取り合わないことが大事です。ここで、おもちゃを買い与えてしまうと、つまり子供の要求に応じてしまうと、この方法をその子はずっと使い続けます。お母さんは一貫した態度で対応することが必要です。同時に以下の仕掛けも作っておくとさらに効果的でしょう。

- ① デパートに行く前におもちゃは買わないことを宣言しておく（ゴネてもムダだと予告）
- ② ゴネずに我慢できたら褒める（ごほうびをあげる）
- ③ そもそも、おもちゃ売り場に行かない（環境を変える）

「～したい」、「～が欲しい」という要求には、一切取り合わない毅然とした態度で臨みます。それと同時に事前の仕掛けをしておくことも大事ですね。

PROFILE

■渡辺貴斗 TAKATO WATANABE

1968年4月20日生まれ。7歳から父である館長から空手の手ほどきを受ける。児童心理学や成功哲学を研究して子どもたちの「心をつくる」指導法に切り替え、2013年5名、2014年・2015年7名、2016年5名、2017年9名、2018年・2019年5名を全少入賞させ、一道場での全国最多入賞を連続で記録する。道場経営でも、一道場で350名を超える大躍進を続ける。



空手道場 養正館 / 静岡県沼津市本田町 11-12



子供への声掛けと道場経営に役立つ！
人生を変えるおススメ本！（第4回）

■子どもの心に届く言葉、届かない言葉（小山英樹著）★★★★★

前回ご紹介した『子どもの心のコーチング』と双璧をなす、コーチングの超おススメ本です。空手指導初期に出会った本で、私の指導理念のベースになりました。コーチング理論が長々書いてある教科書的・学術的な内容ではなく、実例が豊富で会話形式で進んでいきます。よって、具体的にイメージしやすく、自分が優秀なコーチになったように錯覚してしまいます。実際、道場での保護者とのトラブル、子ども同士のトラブル等に、この本のとおりに対応して何度も助けられました。この本に一貫する考え方をまとめますと以下のとおりとなります。

「この子は分からないので教えてあげよう」ではなく、「人は自分の中に答えをもっている」と考えます。「できない子」と見てい

るとイライラして教えたくりますが、「本当は自分で気付いてできる人」と思っていれば教えるという行為がお節介であり、大きなお世話だと分かります。子どもを上から目線で見ているから「指示、命令、教える」という発想になってしまいます。子どもと自分是对等の関係と見れば、「相手の言うことをよく聴く、感謝する、質問する」のような対応に変わります。お母さんがママ友と話すときも「何でできないの!」とは言いませんね。「気にしないでください。私もよく失敗しますから」のように言いますね。相互に信頼し、相互に尊敬する関係になることが大事だということです。そのような目で子どもを見ていれば、どんな言葉も子どもに届くようになるのです。